

中国の歴史における医

山本 徳子

「中国の歴史における医」といえば、まず、思い浮ぶのは扁鵲・張機そして華佗といった人たちであろう。いずれも、古代中国に生きたとされる医人たちである。彼らは、現代の中国において、医学の祖師・医聖（扁鵲）、医方の祖・医中の聖（張機）、外科の鼻祖（華佗）などと称されていることは周知の通りである。その同時代および以後の時代においても、有名・無名、種々の医人たちの居ったことは、正史をはじめ類書・小説類などから知ることができる。このような「医」と称されていたものについての像を解析することを試みたいと思う。そうはいつても、古くからの膨大な内容を有する歴史において諸種の書から「医」たちを求めるのみでは漠然としたものとなる恐れがある。そこで、いまは、とりあえず、制度史的観点に焦点を絞って考察を行うことにする。

ところで、中国において、ことに古代・中世においては医者や「医」と称していることが多い。医者およびばれていることは非常に少ない。すなわち、医某とか太医某・太医という具合である。では、この「医」というものはどのように理解されていたのか、字義の上から、一つの定義づけをしておきたい。後漢の許慎の作った『説文解字』によると、

醫、治病工也。从毌从酉。毌惡姿也。醫之性然、得酒而使、故从酉。王育說、一曰、毌病聲、酒所以治病也。周禮有醫酒。古者巫彭初作醫。

とある。清代の言語学者の段玉裁の注釈を参考にして本条を読むと、醫について、毆について、さらには巫彭のことについてなど、古代医術のありかたが示されている。すなわち、医・毆・鑿・醫は一系の字であって、呪医の時代からの古代医術の展開を字形の上に表現しているものだともいわれているのである。しかし、中国においては、呪医といういいかたはあまり行われておらず、むしろ巫医といわれていたようである。この巫の字義は祝であるという。祝は呪に同じであり、古くは祝の字が用いられていた。ともあれ、医の前の時期の姿として巫医・巫といったものの存在が知られている。『山海経』『海内西経』には巫彭以下五人は不死の薬を操っていたといい、注によると、彼らは神医だと記している。また『大荒西経』には巫彭など十巫の居るところには百薬があったとある。このようなことから、巫が医薬のことに関わりがあったことが知られる。なお、『論語』には巫医について述べられている条がある。いつの時代から巫と医とが分離したのかは明らかではないが、ともかく、扁鵲のころには一応、巫と医とは別れていたようである。

中国の制度史を研究するに当たって、さかのぼって調べる場合に用いられる書に『周礼』がある。周公旦の撰といわれているが、それは疑問であって東周のころのものとしてされており、古代史の重要な資料が含まれている。この『周礼』によると、医・巫・祝について、それぞれの組織が記されている。医の制度はつぎの通りである。すなわち、

醫師、上士二人・下士四人。府二人・吏二人・徒二十人（醫師衆医之長）。
食医、中士二人。疾医、中士八人。瘍医、下士八人。獸医、下士四人。

とある。これによると、人の医療に関係するのは医師・疾医・瘍医である——食医は王の食物についての栄養管理者であり、獸医の対象は獣である——。

この医師が、秦の時には太医令と変わっており、以後、唐代に至るまで続いていた。

唐代の制度史の基本史料とされる『大唐六典』は『周礼』を模して作られたものであるが、唐代の制度を記すとともに、その沿革が書いてあるので、さかのぼって古い時代との関係をもうかがい知ることができる。

太医令の属していたのは太常寺であるが、これは、北朝の北斉の時に始まる（もともと、前漢の時には、太常寺の前身とみられる太常、さらにその前身の奉常という役所に属していたのであるが）。この太常寺とは、国家の祭祀を掌る役所である。そのような役所に太医署が属していたということは、かつてはおそらく太医署の職務とは、人を治療することと共に、国家の祭祀に関係のあったためであろうと解される。そうすると、太医署の職務の変遷ということが考えられるのである。たしかに、唐代においては、太医署は、人の疾病の治療を行う役所であるとともに、医療教育を行う機関ともなっていたのである。なお、この医療教育の中には医業をもって医療を行うとともに、呪禁による治療も含まれていた。一見、巫と医とは分離したというものの、制度面において、なお、宋・元・明の時代に至るまで医療の中に「まじない」治療が存していた。

太医署をはじめとする医事制度は、唐と宋の間において大きく変わった。そして、宋代においては、太医署は医療教育の役所となっていた。金・元の時代においては、中国への侵入者としての立場からの統治形態となり、医事制度も、当然、異なったものとなっていた。

つぎの明代においては、その官制は、漢・唐の旧に沿ってこれを損益したものの、とはいうものの、医事制度は、やはり変遷しており、元の影響をうけている。ことに注目されるのは、医に従事するものを医戸として身分が固定されてしまっていることである。

以上のような各時代における医事制度を基として、当時の医人たちの様相から、中国の歴史における医の姿について論じ、さらには、現代の中国医学史書における、医人に対する視点についても言及したい。

（横浜市立大学医学部医史学教室）